

学位授与機構ニュース

National Institution for Academic Degrees

第 11 号

平成 9 年 7 月発行



★平成 9 年度 4 月期の学士の学位授与試験が行なわれた東京地区試験場（東京大学）と大阪地区試験場（大阪大学）

目

◆学位の申請・授与等の状況

- 平成 8 年 10 月期の学士の学位授与状況…………… 2
- 大学院修士課程相当の課程修了者からの
学位授与申請状況…………… 2
- 平成 9 年 4 月期の学士の学位授与申請状況… 3
- 学位授与のこれまでの状況…………… 4
- 短期大学及び高等専門学校専攻科の
認定状況…………… 5

◆すずかけ散策

次

- 新任の挨拶…………… 及 川 洪 … 6
- 退任に寄せて…………… 平 則 夫 … 8
- ◆機構の窓
- 会議の開催状況…………… 10
- 平成 9 年度主要事業計画…………… 10
- 専攻科を置く短期大学又は高等専門学校の
教務担当教員及び事務職員への説明会の開
催のお知らせ…………… 11
- 平成 9 年度 10 月期の学士の学位授与の
申請受付…………… 11



学位の申請・授与等の状況



○短大・高専卒業者等

686人に学士の学位を授与

－平成8年度10月期申請分－

平成8年度10月期に学士の学位授与申請のあった短期大学、高等専門学校卒業者等777人（うち認定専攻科修了見込みでの申請者581人）について、各専門委員会での修得単位の審査及び学修成果・試験の審査の結果に基づき、平成9年1月27日(月)開催の審査会で審査の結果、686人（うち認定専攻科修了見込みでの授与者516人）に学士の学位が授与されました。合格率は88.3%となっています。

〈平成8年度10月期申請者及び授与者数一覧〉

専攻分野	専攻の区分	申請者数	授与者数
文 学	国語・国文学	12(12)	12
	英語・英米文学	13(7)	8
	仏語・仏文学	1(1)	1
	心 理 学	2	2
	宗 教 学	18(18)	6
教 育 学	教 育 学	12(10)	10
社 会 学	社 会 学	2	0
	社 会 福 祉 学	2	2
教 養	地 域 研 究	3(3)	2
	科 学 技 術 研 究	1	0
社 会 科 学	社 会 科 学	1	0
法 学	法 学	1	0
政 治 学	政 治 学	1	0
商 学	商 学	7(5)	4
経 営 学	経 営 学	7(4)	7
理 学	数 学 ・ 情 報 系	1	1
	生 物 学 系	2	2
看 護 学	看 護 学	71(10)	56
保 健 衛 生 学	検 査 技 術 科 学	26	26
	放 射 線 技 術 科 学	44(8)	43
	理 学 療 法 学	15	15
	作 業 療 法 学	10	10
鍼 灸 学	鍼 灸 学	1	1
栄 養 学	栄 養 学	37(36)	35
工 学	機 械 工 学	61(59)	61
	電 気 電 子 工 学	100(95)	92
	情 報 工 学	20(20)	20
	応 用 化 学	36(34)	35
	生 物 工 学	4(4)	4

	材 料 工 学	15(15)	15
	土 木 工 学	31(30)	29
	建 築 学	15(14)	15
芸 術 工 学	芸 術 工 学	2(2)	2
家 政 学	家 政 学	9(7)	5
芸 術 学	音 楽	55(54)	54
	美 術	138(132)	110
体 育 学	体 育 学	1(1)	1
合 計		777(581)	686

※（ ）内は認定専攻科修了見込み等による申請者数で内数である。

○99人から修士の学位授与の申請

－大学院修士課程相当の課程修了者－

大学院の修士課程に相当する教育を行う課程として認定されている各省庁所管の大学校を平成9年3月修了者から、修士の学位授与の申請がありました。

〈申請者数一覧〉

認定課程名	専攻分野	申請者数
防衛大学校 理工学研究科	理 学	3
	工 学	58
		61人
職業能力開発大学校 研究課程	工 学	28
水産大学校 水産学研究科	水 産 学	10
合 計		99

この申請に係る学位授与の審査は、5月13日(火)開催の審査会に機構長から付託され、審査会では、論文の審査及び試験を行う専門委員会として理学、工学・芸術工学及び水産学の専門委員会を指定、審査の付託が行われました。

現在、各専門委員会では、申請者ごとに論文の審査及び口述による試験が進められており、9月には、合格者に修士の学位が授与される予定です。

○短大・高専卒業生等

281人から学士の学位授与申請

ー平成9年度4月期申請分ー

短期大学・高等専門学校卒業生等の平成9年度4月期の学位授与申請者の受付の結果、18専攻分野34専攻の区分にわたる281人から申請がありました。これは前年の同期の申請者数と（平成8年度4月期214人）と比べ、約1.3倍の増加となっています。

申請者を基礎資格別にみると、短期大学卒業生数が252人（89.7%）と最も多く、次いで飛び級者8人を含む大学中退者が21人（同7.5%）、以下高専卒業生4人、大学卒業生4人（いずれも同1.4%）となっています。

各専攻分野、専攻の区分の申請者数は表のとおりです。

4月期の特徴として「保健衛生学」が109人「看護学」89人と約7割を占めています。

また、今回初めての申請として「独語・独文学」から申請がありました。

今回申請のあった281人については、5月13日（火）開催の審査会に機構長から学位授与の可否についての審査が付託され、審査会では修得単位及び学修成果の審査並びに試験を行う専門委員会を指定、付託が行われ、6月22日（日）に東京大学及び大阪大学の2か所で試験が実施されました。

現在各専門委員会では、修得単位の審査及び学修成果・試験の審査が進められており、9月には合格者に学士の学位が授与される予定です。

〈平成9年度4月期の専攻分野別申請者数〉

専攻分野	専攻の区分	申請者数	
文 学	英語・英米文学	6	12 人
	独語・独文学	1	
	歴史学	1	
	心理学	1	
	宗 教 学	3	
教 育 学	教 育 学	15	
神 学	神 学	3	
社 会 学	社 会 学	1	6
	社会福祉学	5	
教 養	科学技術研究	1	
学 芸	比 較 文 化	1	2
	国 際 関 係	1	
法 学	法 学	2	
経 済 学	経 済 学	7	
商 学	商 学	2	
経 営 学	経 営 学	1	
理 学	数学・情報系	2	3
	物理学・地学系	1	
看 護 学	看 護 学	89	
保健衛生学	検査技術科学	31	109
	放射線技術科学	46	
	理学療法学	20	
	作業療法学	12	
鍼 灸 学	鍼 灸 学	1	
栄 養 学	栄 養 学	5	
工 学	機 械 工 学	1	12
	電 気 電 子 工 学	5	
	情 報 工 学	1	
	応 用 化 学	3	
	土 木 工 学	1	
	建 築 学	1	
家 政 学	家 政 学	5	
芸 術 学	音 楽	1	6
	美 術	5	
合 計		281	

[参 考]

学位授与のこれまでの状況

1. 短期大学・高等専門学校卒業等が大学等においてさらに一定の学修を行った場合の学士の学位の授与（学位規則第6条第1項）

（平成4年10月期～平成8年10月期申請分）

専攻分野	専攻の区分	授与者数
文 学	国 語 国 文 学	22人
	英 語 ・ 英 米 文 学	24
	仏 語 ・ 仏 文 学	2
	歴 史 学	3
	心 理 学	4
	宗 教 学	6
教 育 学	教 育 学	39
神 学	神 学	1
社 会 学	社 会 学	3
	社 会 福 祉 学	11
教 養	比 較 文 化	1
	地 域 研 究	3
	科 学 技 術 研 究	1
学 芸	地 域 研 究	1
法 学	法 学	8
政 治 学	政 治 学	3
経 済 学	経 済 学	5
商 学	商 学	15
経 営 学	経 営 学	12
理 学	数 学 ・ 情 報 系	5
	物 理 学 ・ 地 学 系	1
	化 学 系	4
	生 物 学 系	5
看 護 学	看 護 学	248
保 健 衛 生 学	検 査 技 術 科 学	87
	放 射 線 技 術 科 学	93
	理 学 療 法 学	64
	作 業 療 法 学	61
鍼 灸 学	鍼 灸 学	1
栄 養 学	栄 養 学	46
工 学	機 械 工 学	163
	電 気 電 子 工 学	209
	情 報 工 学	48
	応 用 化 学	98
	生 物 工 学	6
	材 料 工 学	57
	土 木 工 学	46
	建 築 学	23
芸 術 工 学	芸 術 工 学	3
農 学	農 学	1
家 政 学	家 政 学	12
芸 術 学	音 楽 術	145
	美 術	343
体 育 学	体 育 学	1
合 計		1,934

2. 学位授与機構の認定する教育施設の課程の修了者に対する学士、修士、博士の学位の授与（学位規則第6条第2項）

(1) 学士の学位授与

（大学の学部に対応する教育を行う課程）

（平成3年度～平成8年度）

認定課程名	専攻分野	授与者数
防衛大学校本科	理 学	144人
	工 学	1,778
	社会科学	336
	計	2,258
防衛医科大学校 医学教育部医学科	医 学	388
水産大学校本科	水 産 学	1,014
海上保安大学校本科	海上保安	242
気象大学校大学部	理 学	82
職業能力開発大学校 長期課程	工 学	1,341
合 計		5,325

(2) 修士の学位授与

（大学院の修士課程に対応する教育を行う課程）

（平成4年度～平成8年度）

認定課程名	専攻分野	授与者数
防衛大学校 理工学研究科	理 学	18人
	工 学	320
	計	338
職業能力開発大学校 研究課程	工 学	94
水産大学校 水産学研究科	水 産 学	8
合 計		440

(3) 博士の学位授与

（大学院の博士課程に対応する教育を行う課程）

（平成3年度～平成8年度）

認定課程名	専攻分野	授与者数
防衛医科大学校 医学教育部医学研究科	医 学	79人

短期大学及び高等専門学校専攻科の認定の状況

平成9年4月現在

区 分		年 度 別 認 定 専 攻 数						平成9年度 現在認定 専攻数	入学定員
		平成 4年度	平成 5年度	平成 6年度	平成 7年度	平成 8年度	平成 9年度		
短 期 大 学 専 攻 科	文 学	専攻 4(1)	専攻 8(1)	専攻 3(1)	専攻 8(6)	専攻 3(1)	専攻	専攻 22(10)	人 395(160)
	教 育 学	1	5	8(2)	2(1)	4(2)	5(4)	20(9)	375(210)
	社 会 学	3	2(1)	1	1			7(1)	230(20)
	教 養		2	1	1(1)	1(1)	2(1)	7(3)	155(40)
	経 済・商 学		1(1)		2(1)	1	1(1)	5(3)	76(46)
	看 護 学	8	9	2	1	2		22	490
	保 健 衛 生 学				1	1		2	40
	家 政 学・ 栄 養 学	2	8(2)	4	7(4)	8(5)	4(2)	29(13)	390(195)
	工 学				1(1)	1(1)		2(2)	36(36)
	農 学		1					1	15
	芸 術 学	10(8)	4(1)	1(1)	1	3(2)		17(12)	460(315)
	体 育 学				1(1)			1(1)	20(20)
	そ の 他	1			2(2)			2(2)	19(19)
	計	20校 29(9)	29校 40(6)	15校 20(4)	21校 28(17)	22校 24(12)	12校 12(8)	87校 137(56)	2,701 (1,061)
高等専門学校 専攻科	工学	2校 5(5)	4校 8(8)	3校 8(8)	3校 7(7)	5校 11(11)	3校 7(7)	20校 46(46)	356(356)
合 計		22校 34(14)	33校 48(14)	18校 28(12)	24校 35(24)	27校 35(23)	15校 19(15)	107校 183(102)	3,057 (1,417)

1 ()内は、2年制の専攻科で内数である。

2 「短期大学専攻科計」及び「合計」欄の学校数については、実数を記載した。(年度別認定専攻科の学校数の和と平成9年度現在認定専攻数の学校数が一致しないのは、同一の学校が他の専攻の認定を受けたこと等による。)

3 「平成9年度現在認定専攻数」と年度別認定専攻数の和が一致しないのは、専攻科を廃止したこと及び修業年限1年の専攻科を廃止して修業年限2年の専攻科を設置し、新たに認定を受けたことによる。(「計」及び「合計」の欄も同じ)

策 散 け か ず す

新任の挨拶

学位授与機構 審査研究部教授

及 川 洪

7年ほど前から大学院飛び級入学の実施を推進していたこともあって、学位授与機構という新しい制度（機関）ができることは知っており、実際の手続などについても関心はありました。当時自分自身が直接関与するとはまったく予想もしていなかったのですが、縁あって去る4月2日からこの機構の一員に加えていただいておりますので、新人として少し自己紹介をさせていただきます。

私は昭和8年（1933）に樺太で生まれ、小学校6年の夏まで樺太内を転々としてきました。第2次世界大戦の敗戦直後に父母の郷里である岩手県に引揚げ、そこで6年半の間今風に言えば中高一貫教育を受けました。昭和27年（1952）東北大学に入学するため仙台に移り、それから今年の3月末まで学生として9年、教師として36年を仙台で暮らしました。その間、通った先はずっと工学部の金属工学科（とその関連学科）のみで、カナケに漬かって45年と自嘲して居ります。

学生時代を過ごした研究室は物理（理学部）出身の教授と金属（工学部）出身の助教授が組んだ講座でしたから、色々なものごとに対して幅の広い対処の仕方を習ったように思います。原則的なことでの議論は色々な面からかなり徹底して行うが、一方では現実的な対応には困らないような方策も立てて実行するという習慣はこのあたりに根ざしているのかもしれませんが。大学院修了に引き続き、そのまま教官として任用され、大阪から移られた方と新設の講座で教授・助教授のコンビを組むことになりました。この先生は若手が行う研究には最大限の自由度を与える方でしたから、そ

の下に籍を置いた私はしあわせであったと感謝しています。

このような環境にあったためか、私は大学院博士課程以来研究テーマを変えていません。理学的センスで言えば、結晶体は高温になるとどうして弱くなるかという話ですし、工学的センスで言えば、どのような条件なら高温での加工が容易に行えるか、逆にどうすれば高温で弱くなることを防ぐことができるか（耐熱材料の開発指針）などということになります。40年前には高温の強さ（の基礎）に興味をもち、系統的な研究を進めるグループはごく少なかったこともあってか、特に共同研究を行ったわけでもないのに、かなり親しい友人が国外に何人も居るのは真に幸いなことです。研究活動の場はほとんど日本金属学会（会員数1万人弱）でした。本部が仙台にあることもあって30歳台から雑用係を務め、色々な仕事をしたあげく、最後は会長職までさせられましたから、金属学会タタキアゲの会員ということになりましょう。

教育機関に属していましたから、研究以外のことにもかなりの時間とエネルギーを費やしました。教室で行う授業には最低限でもある種のことを行う必要があると考え、毎回出席をとり、簡単な宿題を出し（次週提出、次々週チェック・評価記入の上返却）、毎月中間試験（次週までに評価公表）というスタイルをとり続けました。レポートのチェックは助手に頼みましたが、このようなやり方を実行しようと思えば週1回の授業でもかなり手間ひまがかかります。この平常成績が良ければ期末試験無しで単位を認定することにし、毎年1/4～1/3の学生がこの条件を満たしました。なお、4年になってまがりなりにも研究（のまねごと？）をするようになれば、当人のペースを尊重しました。3年までの鬼の顔が、研究室で暮らすようになると急に仏に変わるわけです。もっとも大

学院に入ると目標にしているものがそう簡単にはできないレベルではないということがわかって、まただんだん鬼に見えてくると言った学生がおりました。

50歳に手がとどく頃に学科改組を手掛けました。丁度学科主任であったためなのですが、長老先生お二人の掛声に乗って3学科の再編を行うことができました。これは全国の金属系教室の変革の先鞭となったもので、この後高専でも金属工学科が材料工学科に変わるきっかけとなったものでした。この件以来、学科のみならず工学部のいわゆる管理運営にも片足を入れる羽目になりました。時は丁度大学改革の声が挙ってきた頃ですから、教務委員長、制度（改革）委員長などとして、改変目標に近づくことに多少はお役に立てたかと思っています。

最後の数年間は評議員（工学部では実質副学部長）、工学部長に選出され、学生6,000名、教官450名（大学院としては約700名）、職員300名のマネージに当たり、研究（講座運営）はほぼ諦めざるを得ませんでした。この時期は全国の拠点大学が、東大に続けとばかり大学院重点化整備に向かったときでしたから、大学では色々な改変が試みられた時期でもありました。私はこの間ずっと“行いたいと考えたことは、なるべく実行する”という立場で行動しました。規則などについて「良いと書いてあるから行う」という立場と「だめと明言していないから行い得る」という立場とでは、実際の行動に大きな差を生じる場合が多々あります。教師は法令上ある程度の自由度をもっていますから、現行の法律・省令の下でもかなり思いきったことができないわけではなく、それを実際に行うかどうかは教授会自らの決心にかかっている場合がかなりあります。

御存知のとおり、大学（学部）ではほとんどすべての事がらの決定に教授会で全員の賛成を必要とする習慣ですから、約150名（大学院では約220名）の教授に賛成してもらおう（少なくとも反対と

は言わない）には、それなりの工夫がいります。組織全体にかかわること、たとえば学部の名称、教授会の構成などについては全体が揃う必要がありますが、実は学科ごとや教官個人ごとでもよい場合が結構あります。この場合には、ある条件の下での実行に賛成する人々だけでもよいから行動を起こす方が良いのです。この際大切なのは、基本的なところで行ってはいけなさと考えるならともかく、自分（達）は行いう気が無いからということと他人が行うことに反対はしないという態度です。このことさえ了解し合っていれば、同じ学部の中でもグループごとに結構良いことを始めるものだというのが私の実感です。私はこのやり方を“この指とまれ”方式と称しておりますが、教師仲間にもさっさと動いてみようという人（分野）とかなり慎重な人（分野）がおり、大所帯の中でそれぞれ相手を殺さずに運営していくための一つの方策であろうと思っています。

さて、初めにも書いたように、同じ場にじっと勤めていた文字どおりの「井の中の蛙」が、この4月に初めて勤務先を変えて学位授与機構にお世話になることになったわけですね。井戸の中からのぞいていた空がどれだけ広いものだと感じられるかは、これからの過ごし方によるのでしょうか。この蛙が新しい立場でどう振る舞ったら良いかについては、かならずしも良くわかっているわけではありませんが、日本の高等教育に少しでもお役に立つことを願って努力するつもりです。皆様方の御指導・御鞭撻をお願いいたします。

おいかわ・ひろし 昭和8年生 工学博士
東北大学名誉教授、平成9年4月から現職
専門：材料物性学、金属材料学

学位授与機構退官に寄せて

平 則 夫

この3月31日付で学位授与機構(以下単に機構)を停年退官いたしました。機構に参ります前に、東北大学医学部で23年3か月も教授職に就いておりましたせいか、機構教授としての2年間はつかの間のような気がいたします。そして、退官に際しては、機構長の田中郁三先生を始めとして機構の運営に関与されている諸先生の御高配によって名誉教授の荣誉に浴しました。機構教授としての2年を顧みますと、機構への貢献度は甚だ怪しいだけに、名誉教授の称号を頂戴すること自体内心忸怩たるものがあります。

ところで、機構教授は2年間という短いものでありましたが、機構創設準備に関係された方々の御高配によって、発足の少し前から準備の手伝いをすることになり、発足後は、機構の運営委員、審査会委員(副委員長)、医学専門委員会委員(主査)の任を仰せ付かりましたので、機構とのお付き合いはほぼ5年に及びます。しかし、当初は医学部教授としての本業もあり、加えて医学部長をも併任しておりましたので、そちらの方の仕事で手一杯でありました。それで、実のところ医学専門委員会の主査として、防衛医科大学校医学教育部医学研究科修了者から提出される博士論文の審査だけを天に恥じないようにやれば許してもらえらるだろうくらいに考えておりました。ということで、生涯教育推進の一環として創設された機構の理念には感服しましたものの、機構は私にとって依然よその機関に過ぎませんでした。

このような状況で、機構長を始め先任の機構の教授の方々の御高配を有難く頂戴し、東北大学を停年退官するなり機構に移りました。しかし、医学以外の専門委員会にオブザーバーとして出席するなり、はたと困ってしまいました。専門委員会はその専攻分野・区分の審査基準がまだできてお

らず、基準作りから始めなければならないものから、半ばルーティン的に学士に関する審査を行えばよいだけのものまで多岐にわたっておりましたが、問題が出て来た場合、解決の指針となるのが関係法規と先例ないし他の専門委員会での事例であります。それで、関係法規も身に着いていない上に先例も知らない私は、薄氷を踏む思いで専門委員会に出席しました。幸い先任の教授や事務官の中には、これらについて生き字引きのような方がおられたので、これまで大過なく過ごすことができました。この場を借りて御礼申し上げたいと思います。

機構の仕事の中で最も大きいのは学位に関する審査と短大・高専の専攻科の認定に係る審査であります。実質的にこの仕事に当たるのは各専門委員会・部会であります。特に学士号の授与申請者の多い専門委員会・部会の委員の方々は、年2回、しかも短期間に、物理的にもかなりの量の学修成果を読み、作題をし、採点を行わなければなりません。御自身の大学で教育・研究に超御多忙なのにもかかわらずよくぞこれほど熱心に審査の仕事を行なうくださるか、いつも感服しておりましたが、改めて感謝申し上げます。私がこれまで、直接専門委員への御就任を打診申し上げたのは、医学・薬学専門委員会の方々だけでしたが、必ずといってよいほど「お国のためならば」とおっしゃって御内諾をくださいました。そして、超御多忙の中、文字どおり天に恥じない審査をしてくださいました。他の専門分野の委員の方々もそのようなお気持ちでお引き受けくださったものと思います。ジェネレーションが下れば「お国のためならば」というような考えではなくなるかも知れませんが、どのような標語であれ、この国家的プロジェクトの推進に御協力くださいますようお願い申し上げます。

最後に機構教授をお引き受けしてよかったことを2つ3つ申し上げます。1つは今の若い人たちも依然頼もしいということを実感できたことであ

ります。茶髪や男の子のピアスなどが流行し、私のような年配の者は、得てして「今時の若者は」などと蔑視しがちですが、2年間に4回、機構が行った試験の監督をし、受験生のひた向きの向上心に強く心を打たれました。機構の行う試験を受けに来る若者の数は全体から見れば取るに足りない数でしょうが、指数関数的な増加を見ると心強い限りであります。それにつけても、社会が機構で授与する学位が大学で授与するものと等価であることをより一層認識し、大学での学位取得者と同等に扱うことを強く希望いたします。

2つ目は防衛医科大学校医学教育部医学研究科修士課程のエネルギーであります。学問には年齢制限はありませんが、私の専門とする医学の場合、博士課程はほぼ30歳で修了します。しかし、防衛医科大学校の場合、大学院に相当する医学研究科に入学する以前に課せられた任務の関係で、研究科在学が30歳代の前半となり、したがって修了するときには、35歳を超えることとなります。にもかかわらず、多くの場合、ひとりで物凄い量の実験をこなして博士論文にまとめ、口頭試問には、

つい1週間前に出た *Nature* 誌に載った関係論文についても適確に答えることができるなど、そのエネルギーというかバイタリティに深い感銘を受けました。博士号を授与された諸君の各職場でのますますの発展を祈るとともに、後に続く研究生も先輩と同様であることを希望します。

機構は短大・高専卒業者や省庁大学校卒業者等にとって、福音的な機関であることは間違いありません。今後、機構がますます発展することを祈ってやみませんが、機構は圧倒的に他機関の先生方の「お国のために」的な御協力によって存立しておりますので、今後とも機構への相変わらぬ御支援をお願い申し上げます。機構教授在職中にお寄せくださった御高誼に重ねて厚く御礼申し上げます。

たいら・のりお 昭和6年生 医学博士
東北大学名誉教授、平成7年4月から学位授与機構教授、平成9年3月停年退職、学位授与機構名誉教授
専門：薬理学

機 構 の 窓

○会議の開催状況

□審査会

第35回 平成9年5月13日(火)

- (1) 学位規則第6条第1項に規定する学士の学位授与の審査の付託について
- (2) 認定課程修了者に係る修士の学位授与の審査の付託について
- (3) 平成9年度教育の実施状況等の審査について

□運営委員会

第21回 平成9年6月25日(水)

- (1) 教官人事について
- (2) 審査委員について
- (3) 専門委員について
- (4) 平成9年度主要事業計画について
- (5) 平成10年度概算要求事項について
- (6) 事業の実施状況について
- (7) その他

○平成9年度主要事業計画

1. 学位の授与

- (1) 短期大学・高等専門学校卒業者等に対する学士の学位の授与関係
 - ① 学士の学位の授与
4月・10月申請受付、9月・3月学士の学位の授与
 - ② 専攻の区分ごとの修得単位の審査基準の整備
 - ③ 短期大学、高等専門学校の専攻科の認定
9月末申出受付、2月認定の判定
 - ④ 認定短期大学・高等専門学校専攻科の教育の実施状況等の審査

- 5月末審査書類受付、2月適否の判定
- (2) 認定課程修了者に対する学位の授与関係

① 学位の授与

○学士

- ・防衛大学校本科、防衛医科大学校医学教育部医学科、水産大学校本科、海上保安大学校本科、気象大学校大学部、職業能力開発大学校長課程修了者

○修士

- ・防衛大学校理工学研究科、職業能力開発大学校研究課程、水産大学校水産学研究科修了者

○博士

- ・防衛医科大学校医学教育部医学研究科修了者

② 認定課程の教育の実施状況等の審査

5月末審査書類受付、2月適否の判定

2. 調査研究

学位の授与を行うために必要な学習の成果の評価に関する調査研究

- ① 単位累積による学習の体系性に関する調査研究
- ② 高等教育レベルの生涯学習の評価に関する調査研究等
- ③ 研究紀要「学位研究」の取りまとめ

3. 情報提供

大学における各種の学習の機会に関する情報の収集、整理及び提供

- ① 科目等履修生制度の開設大学一覧
- ② 学位授与機構認定短期大学・高等専門学校専攻科一覧等の作成

○専攻科を置く短期大学又は高等専門学校の
教務担当教員及び事務職員への説明会の開
催のお知らせ

専攻科を置く短期大学又は高等専門学校の教
務担当教員及び事務職員への説明会を下記のと
おり開催いたします。

1. 日時

平成9年8月1日（金）

午後1時30分～4時00分

2. 場所

昭和女子大学「グリーンホール」

東京都世田谷区太子堂1-7-57

3. 対象

専攻科の教務担当教員及び事務職員

4. 内容

- ① 学位規則第6条第1項に基づく学士の
学位授与について
- ② 学士の学位の申請手続きについて
- ③ 専攻科認定申出の手続き等について

○平成9年度10月期の学士の学位授与の申請受付

申請の時期の区分	申請方法	受付期間
10月期の申請	郵送（書留）のみ	平成9年10月1日（水）から 10月7日（火）（当日消印有効）

編集後記

◇ 梅雨前線が活発となり西日本地区に大きな被
害を与えた梅雨が明け、ひまわりの似合う本格
的な夏を迎えました。

◇ 前号に載せられなかった平成8年度10月期の
申請者の学士の学位授与状況及び学位授与のこ
れまでの状況を今号に載せています。

平成8年度10月期の学士の学位授与申請者は
前年同期比で約1.4倍、平成9年度4月期の申
請者は同約1.3倍の伸びとなっています。

◇ 今号には、前号の黒羽教授とともに3月に学
位授与機構を退職なされた平教授の機構での業
務を振り返ってのお言葉をいただいております。
また、4月から機構の教授として着任された及
川教授に自己紹介をはじめ、機構での今後の抱
負などについて寄稿いただきました。

◇ 本ニュースは年4回発行しており、その内容
は年2回実施している短大・高専卒業者等に対
する学士の学位の授与に関する受付期間、出願
方法、申請に対する情報、各種の問い合わせに
答えるコーナー等、また、省庁大学校の修了者
に対する学士、修士、博士の学位授与に係る申
請者、授与者数等、また、機構が設立に至った経
緯等を機構創設関係者等の方々に記事をいただ
いてきました。

◇ 本ニュースについては、内容が堅苦しく読み
にくいとの声も聞きますが、審査機関である
という事業の性格上、関連する事項を正確に報告
することを基本としつつ、なお、工夫改善をし
ていきたいと思っています。（K. H.）

編 集 学位授与機構広報委員会
〒226 神奈川県横浜市緑区
長津田町4259番地
☎ 045-922-6441
Fax 045-923-0258
印 刷 鮮明堂印刷株式会社
〒141 東京都品川区豊町1-7-3
☎ 03-3492-3641